

此四山四河之中に、手の広さ程の平かなる処あり。爰に庵室を結で天雨を脱れ、木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折て身を養ひ、秋は果を捨て命を支へ候つる程に、去年十一月より雪降り積て、改年の正月

今に絶る事なし。庵室は七尺、雪は一丈。四壁は氷を壁とし、軒のつららは道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本より人も来らぬ上、雪深して道塞がり、問人もなき処なれば、現在に八寒地獄の業を身につぐのへり、生ながら仏には成ずして、又寒苦鳥と申鳥にも相似たり。頭は剃る事なればうづら（鶉）の如し。衣は氷にとぢ

られて鴛鴦の羽を氷の結べるが如し。かかる処へは古へ昵びし人も問わず、弟子達にも捨てられて候つるに、是御器を給て、雪を盛て飯と観じ、水を飲てこんず（漿）と思。志のゆく所思遣せ給へ。又々申す可く候。

恐々謹言。

（弘安三年正月二十七日）